

リ、是ヨリ左八橋ノ道也、八橋ハ自追分、到于此、十町許云々、などいへるにて知べし、さて伊勢古  
 今のは今の矢矧川の川上などにやあらん、そは伊勢物語に、略中やつはしといひけるは、水ゆ  
 くかはのくもでなれば、橋やをつわたせるによりてなんやつはしといひけるとあり、古今羈  
 旅の詞書は、これをとりに略し書る也、伊勢物語の眞名本に、水ゆく川のくもでを、水堰河之卿  
 手と書て、ミヅキテカハノクモデとよめり、卿手は借字にて隈處クマツの義也、伊勢の雲津も川の隈  
 處より出し名也、又隈津クマツの義としてもきこゆ、さて川曲カグマの處に據かれし上つかたは、水堪てひ  
 ろびると瀬もはやからず、橋などわたすにもたよりよきことわり也、その廣き川中へ杭打か  
 まへて、つぎ／＼橋を架わたし、此方彼方に通はせられたれば、八橋とはいへるなるべし、和名抄八  
 に、伯耆國八橋郡八橋也、八之とあるも同義とみゆ、略中かれば伊勢古今にいへる八橋は、今  
 の所のごと、わづかなるせゝらき水にはあるまじくぞおもはる、更級日記に、八橋は名のみ  
 して橋のかたもなく、何の見所もなしとあるは、今の所のさまに聞ゆれば、更級より後の書な  
 るは、今の八橋の所とは定むる也、さて伊物の朱雀院塗籠御本に、水のくもでにながれわか  
 て、木やつわたせるによりてなん八橋とはいへると有は、や、後に書かへて、詞を改められし  
 なるべし、舊本今昔物語廿四には、河ノ水出テ卿手也、ケレバ橋ヲ八ツ渡ケルニ依テ、八橋トハ  
 云ケル也とあり、是もさる本によりて書出せしとみゆ、略中かれば、水が卿手のさまになが  
 るべきことわりなければうけがたし、

〔伊勢物語〕上むかし男有けり、その男身をよくなき物に思ひなして、京にはあらし、あづまの方に  
 すむべき所もとめにとて行けり、もとより友とする人、ひとりふたりして、もるともにいきけり、  
 道まれる人もなくて、まどひいきけり、みかほの國八はしといふ所にいたりぬ、そこを八橋とい  
 ひけるは、水ゆく川のくもでなれば、橋を八わたせるによりてなん八はしといひける、其さわの